

3歳児を対象としたオンライン表現活動の実践 ～「思いやり みんな違ってみんないい」を通して～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

池田桃香・浦津七彩・江頭未彩・
大隈彩花・小野綾香・片渕杏子・
川上梨恵・木下智永里・三宅芹菜・
山下絢女

1. テーマについて (池田桃香)

3歳児の子どもたちに伝えたいテーマについて検討した時、「思いやり」というキーワードが出た。これまでの実習などで学んだ3歳児の子ども達の姿を思い出し、3歳児の子ども達がどのような場面で「思いやり」を体験しているのかを考えた。

例えば、お友達とおもちゃの貸し借りで喧嘩が起きたというエピソードでは、おもちゃを貸して貰えなかった子の立場では「貸してと言ったのに貸してくれなかった」という気持ちが見られるが、貸してと言われた子の立場になると「自分が今このおもちゃで遊んでいるのに」というそれぞれの気持ちがある。このように自分と相手のそれぞれの気持ちがあることやすれ違いに気付き、相手の気持ちを知って受け止める体験が、子ども達にとっての「思いやり」に繋がっていると考えた。

また、1人ひとり得意なことや素敵なおとこを持っており、それぞれの良さを知って大切にすることも思いやりだと考えた。お互いの良いところに気付いて受け止め合うことを劇を通して伝えたいと考え、「みんな違ってみんないい」というサブテーマを設定した。意見を出し合いながら「思いやり」について掘り下げ、「お互いの得意なことや素敵なおとこに気付く」という点と「自分の気持ちを伝えて相手の気持ちにも気付き、受け止める」という点に着目した。この2つを軸としてオリジナルストーリーを制作して劇で表現することを決め、具体的な物語の内容やセリフ等を考えた。

2. 内容について (木下智永里)

① あらすじ

ある日、オオカミくんは お友達と遊びたくてうさみちゃんの肩をトントンする。しかし、オオカミくんは優しく話しかけたつもりだったのに、うさみちゃんにとっては痛くて泣いて逃げていってしまう。

↓

うさみちゃん、うさこちゃんは、オオカミくんが急に叩いてきた理由が分からず、オオカミくんの家を探しに行く。

↓

うさみちゃんうさこちゃんが、オオカミくんの家を探している途中で、いぬおくん、チュー太くん、もんきちくんに出会う。

↓

いぬおくんは鼻がよく効き、チュー太くんは体が小さいため道案内ができ、もんきちくんは高いところに登ることができる。

3匹の得意なことを合わせて、オオカミくんの家に着くことができた。

↓
そこで、どうぶつたちはせっかくオオカミくんの家に来たから、オオカミくんをびっくりさせようとする。

しかし、オオカミくんはびっくりさせられてとても怖くて悲しかった。どうぶつたちは楽しむためにびっくりさせたことを伝えてオオカミくんの気持ちを聞き、謝る。

↓
そして、うさみちゃんはなぜ叩いたのかオオカミくんに聞くとオオカミくんは叩いてなくなったことを知る。

オオカミくんはみんなよりも力が強いから他の動物たちにとっては優しくしたつもりでも痛いということを知る。

↓
お互いの気持ちを伝え、その気持ちを受け止めて仲直りすることができた。

↓
おしまい

②大切にしたこと、工夫した点

人形でするより実物の人間でした方が表情が見えるから実物の人間ですることになった。また、人間役としてするより、動物役としてした方が子どもたちに伝わりやすいから動物で劇をすることにした。

悪役になりがちなオオカミなどにマイナスなイメージがついているけど、理由がちゃんとあるからそのイメージをあえて覆そうという工夫をした。

保育園でよくあるような食い違いや葛藤を表して少しでも相手の気持ちを考えてみてほしいという願いも込めた。

3. 台本の制作、修正について（江頭未彩）

既成の絵本には私たちが伝えたいテーマがなかったため、自分たちで一からオリジナルのストーリーにし台本を制作した。ある程度考えたストーリーを元に具体的にセリフを考えてた。3歳児にも伝わるように言葉を選び考えるのが難しく、何度も意見を交流し制作した。動物たちの個性を活かすようなセリフにするよう心掛けた。初め作った台本を元に劇を通し、流れを確認したうえで言葉のニュアンスを変えた方がいいところや先生からのアドバイスを元に台本を修正した。狼に仕返し、やり返しににいくという言葉を選んでしたが、子どもたちに狼をいじめてるといふ捉え方になってしまいあまり良くない言葉だったため「狼を驚かす」という言葉に変えた。また、一つ一つのセリフがあまり詳しくなかったので分かりやすいように具体的な言葉にするよう変えた。なぜ狼のところへ行くのかを明確にし、それを他の動物たちに伝えることでうさぎの性格をハッキリすることができ、より子どもたちに伝えることができる。それぞれ得意なことを分かりやすくするために「こんなことができるんだね」「すごいね」と言葉にすることを意識した。台本の中に子どもたちとの掛け合いも入れることで一緒に物語を楽しむことができるようにした。



(台本制作中)

4. 音楽について (川上梨恵)

「思いやり～みんな違ってみんないい～」は、学生が動物となり、劇を行った。この劇の中での音楽では、最初の始まりでは、動物村の背景がカメラで映し出されているため、オープニングにふさわしい今から始まるというワクワクな期待をもってもらえるような曲を用いた。また、うさぎの耳がピョンとでていたり、落とし穴に落ちる、リンゴが落ちてくる、橋が揺れるなどの場面では、効果音をつけることで、より雰囲気をつけるように工夫をした。そして、それぞれの動物たちが登場してくる場面では、動物のイメージがつきやすいような曲を選んだ。例えば、うさぎが登場するところでは、「うさぎ」を高い音域で弾き、狼の登場では、「狼なんて怖くない」を低い音域でゆっくり弾き、ネズミは、「一匹の野鼠」、猿は、「アイアイ」を登場前に弾き、動物たちの登場を印象づけられるように考えた。難しかったところは、劇中のBGMのように弾くため、登場人物のセリフを言う場面と弾く場面とで合わせることが必要になってくるため、曲の長さ、音量、終わり方などを劇を何回も通していく中で話し合い決めていったことだ。そして、エンディングでは、「小さな世界」を持ってきてみんなで歌った。自然と手を繋ぎたくなるような曲でみんなが仲良くなって終わるようにしたかったため、この曲がエンディングにふさわしいと考え選んだ。

5. 背景や小道具について (小野綾香) (片淵杏子)

① まず草や木、雲、太陽を作ることになった。バランスを見ながら草や雲はどのくらい大ききにするのか、数はどのくらい必要かを決め、太陽や雲は段ボールをその形に切り、ちり絵で色をつけていった。最初は壁に貼る予定だったが、粘着力が少し少ないやつを貼ると練習中に落ちて来たため強いやつにするかという意見があったが、学校の壁が剥がれてしまう可能性があることに気づき、草はダンボールを草の形にきり立てれるように二枚折りにして、絵の具で色をつけたり、折り紙でちぎり絵にして2色の草を作るなどの工夫を加えた。

木は段ボールで木の形に切り、木の部分はダンボールを3つ重ね絵の具で塗った。葉っぱの部分は大きい丸を3つダンボールで作ちり絵で色をつけ、木の形に見えるようにバランスをとりながら3つ重ねたダンボールにガムテープをあわせた。また木に見えるようにダンボールを枝の形切り、ちり絵で色をつけて木の部分の段ボールに横から枝が刺さるよに切り込みを入れる工夫を行った。

② 私たちのグループでは、動物を用いた劇をして子どもたちにテーマを伝えるという内容だった。そのため殺風景にならずに見た目から子どもたちが物語に入って行けるよう小道具を準備した。

具体的には、りんごの木や草、太陽や雲、人参、リンゴなどを画用紙、ダンボール、折り紙などを使い準備した。りんごの木は高さが出るようダンボールを3つ重ね透明テープとガムテープ2つ使い分け頑丈にした。道端に置く為の草は、絵の具で緑に塗って製作したが文字が透けていたり、色味が足りないという気づきから、折り紙をちぎり貼るという工夫を加えた。すると色味も良くなり、目にとまるようになった。動物むらやオオカミの家など製作すると時間のかかるおおまかな物は、画用紙に描きそれをカメラで調整するなど決められた期間内に用意できるものと出来ないもので判断をし小道具を準備した。オオカミの家は画用紙にただ描くのではなく、小窓を作り切り取って用意しておく事で、家の様子をのぞける仕組みにした。他にも道を子どもたちに尋ねる場面では、指さしだけでなく、ハートと星の目印をつけた小道具を準備することによって、分かりやすくするよう心がけた。

小道具、背景を準備する際には、皆で話し合い意見を交わすことでより工夫した物を制作することが出来たと考える。



(りんごの木の製作・貼り絵)

6. カメラワーク(場面の見せ方)について (大隈彩花)

私は、カメラワークを担当した。今回の遊びと表現発表会は初めてのオンラインで行われ、初めはどのようにカメラを使えば良いのかも分からず戸惑ったが、練習を重ねるうちにより良いものができてきた。

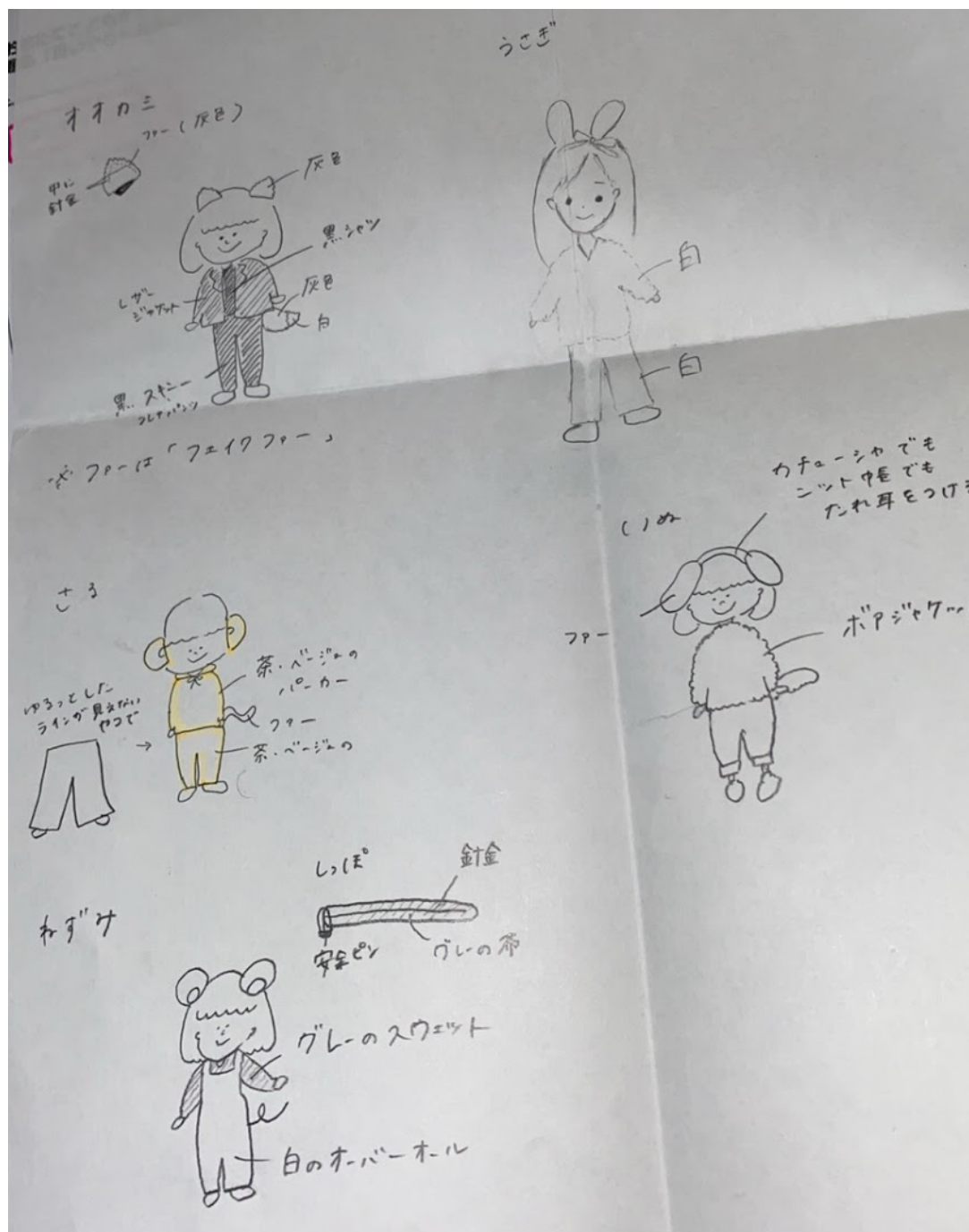
子どもたちに見えやすいようになるべく人物をアップにして写したり、ネズミがオオカミの家を訪ねるシーンでは、ふたつの場面が繋がっているように見えるように工夫した。最後の歌を歌うシーンでは、一人一人登場人物をアップして写し、子どもたちに分かりやすいように工夫した。

子どもたちになんの動物か聞く時に登場人物をアップで写すことで、子ども達も理解し、「うさぎ」など答えてくれた。

また、自分たちでカメラを使って行うということが始めてで不安だったが、練習を重ね上手くいったと思う。

7. 衣装について(浦津七彩)

衣装は二人で担当し、動物のイメージに合わせてデザインを考えた。持っている服で再現できる部分は出来るだけそこで再現した。しかし、そこで既存のものに頼りすぎるとオリジナル性がなくなり、安っぽい仕上がりになると思ったので、動物の耳やしっぽは手作りにした。イメージ図は下のようなもの。



耳を作る際は厚紙(画用紙)、布、針金、ピンをいいうさぎの耳はカチューシャを使用した。耳をピンで作る際は安定しにくいので一つの耳につき2つのピンを使う。しっぽを作る際は以下のサイト

(<https://staffblog.okadaya.co.jp/brand/okadaya-shinjuku/shop/fabric-house-4f-5f/8d0502bb-dbc-489b-b32d-fdfb3dd278e8?categories%5B0%5D=HOW+TO>)を参考にした。

8. 練習で工夫したとこ意識したことについて（三宅 芹菜）

1回目のカメラを使っでの練習では台詞もどういう風なカメラワークにするか、音楽をどういう風にするか背景や小道具をどのように使うのかが決まっていなかったので、自分たちが台本を見ながら台詞を言って動きをやってみながらカメラワークや音楽、小道具を決めていった。その後に2回目カメラを使っでの練習までにカメラワークや音楽、小道具をどういう風にしてそれから動きを修正していき、臨機応変に対応できるようにみんなが練習に集中した。

2回目のカメラを使っでの練習では、音楽や小道具を実際の本番のようにやってみた。その際に、細かい動きを中心に意識し練習をした。A場面とB場面という画面を分けA場面ではどういう時に使うかB場面ではどういう風にするかが決まった。そしてそこから細かい動きを確認しながら1回1回メモを取るようし、その後に反省会をして次に向けての改善点を話し合った。



3回目の練習では2回目の改善点を活かし台本を少し変えた。まず、子ども達に衣装だけで動物が伝わるか不安だったのでその動物らしい名前を考えた。そして子ども達に分かりやすいような言葉に変えた。細かい説明を付け加え、できるだけ背景も表現できるように制作物も作った。

9. 役割分担について（山下 絢女）

①準備の役割分担

- ・衣装……浦津七彩、小野綾香
- ・台本……池田桃香、木下智永里

- ・音楽……川上梨恵、三宅芹菜
- ・セット……大隈彩花、山下絢女
- ・カメラ……江頭未彩、片渕杏子

②発表の役割分担

- ・カメラ&ナレーション……片渕杏子、大隈彩花
- ・狼……浦津七彩
- ・うさぎ……江頭未彩、小野綾香
- ・いぬ……木下智永里
- ・ねずみ……池田桃香
- ・さる……山下絢女
- ・ピアノ……川上梨恵、三宅芹奈

③役割分担において配慮した点

準備における分担ではみんなが協力しそれぞれ自分の役割ではないところでも手伝いできる人ができることを行った。

発表の分担では初めはもう少し多くの動物が出るようにしていたが3歳児を対象とするため、情報量が多いと物語が伝わらないことや場面を2つ使うことからカメラの人数が多い方がいいという意見が出た為本番はこのような形で行った。効果音やピアノが間に入る場面が多いため1人の負担を減らすためピアノも2人にして、ピアノを弾いていない人はB場面のカメラの調節を行った。

10. 結果、成果(子どもの反応)について (池田桃香)

劇の中で、子ども達に問いかける場面を多く作った。出てきた動物の名前を尋ねて一緒に呼んだり、動物達がどちらの道に行ったのかを子ども達に尋ねて進む場面を作り、子ども達とやり取りをしながら物語を進めるようにした。しかし本番では、私達がセリフを言っている間の子ども達の声が聞き取りにくかったり、マスクをしていて口元が見えなかったりしたことがあり、子ども達とやり取りが出来ているかが分からない状態だった。後日、子ども達の様子を映像で見た時に、子ども達がどんな反応だったのかを詳しく知ることができた。うさぎや犬の耳を見せて、子ども達に「何の動物かわかる？」と尋ねたときには、子ども達は「うさぎ」「犬」と大きな声で答えてくれていた。劇の中で子ども達に道を尋ねる場面があり、「星の道とハートの道、どちらに行ったかわかる？」と聞くと「星の道」と答えてくれた子や指差しをして教えてくれた子がいた。

また、狼にりんごを落とす場面では、狼の「何が落ちてきたの？」という何気ないセリフに「りんごだよ」と答えている子もいて、問いかけ以外のセリフにも答えてくれていた。私達が予想していなかった何気ないセリフでも子ども達とのやり取りが生まれていた。



1 1. 発表を終えての感想

発表テーマを「思いやり」に決めてから、どのような物語の展開にすると子ども達に分かりやすく伝わるのかを何度も考えた。少しの言葉の選び方や言い方の違いで、全く違う意味に聞こえたり、伝わる内容が変わってしまうことが物語の制作の中でとても難しく感じた。台詞の1つひとつに込められている気持ちや、何を考えて発する言葉なのかを丁寧に想像して表現することが大切だと学んだ。「思いやり」という言葉自体が漠然としているため、劇を通して具体的にどのようなことを伝えたいのかを明確にするまでに少し時間がかかったが、何度も意見を出し合って修正し、完成させることができた。登場する動物たちの性格や得意なことを具体的に考え、それらを物語の中に取り込んでいく中で「みんな違ってみんないい」というサブタイトルや物語の内容が深まっていった。人との関わりにおいて時には意見のすれ違いが生まれることや、それぞれの得意なことや素敵なのところに気付いて受け止め合うということを「思いやり」として劇の中に取り入れることができたと思う。また、オンラインならではのカメラワークを活かして場面を切り替えたり、背景や小道具の大きさ、配置を工夫したりしながら劇をすることができた。

物語を一から作り上げるのは大変だったけど、全員で協力しながら完成させることができて良かった。(池田桃香)

オンラインという初めての形ではあったが、オンラインだからこそできるカメラワークなどがあってよかったと思う。例えば遠近法でオオカミの家を作ったところはオンラインでなければ出来なかったと思うし、材料も小さく、少なく済ませることができたのではないかと考える。言葉や表情が伝わりにくいというデメリットはあるが、それをメリットに変えるように皆で考えることができてよかったと思う。(浦津七彩)

今回は初めての試みで苦戦することもあり難しかった。テーマを決め1から物語を決めていき子ども達にどんなことを伝えたいかを話し合い制作していった。思いやりを元に3歳児にも伝わるように考えることは簡単なことではなかったけど、みんなの意見を合わせながら考えた。今回は直接ではなくカメラ越しで子ども達に向けて発表しないといけなかったのでカメラでどんな風に見えるかやカメラワークなど今までしなかったことも気をつけなければならなかったので大変だった。でも、一人ひとりがそれぞれの役割をこなし、本番に向けて台本を変えたり小道具や衣装を作ったりと協力し合ったので無事に本番で発表することができた。子ども達の素直な反応を見ることができ、とても学びになった。(江頭未彩)

私は遊びと表現を通して沢山のことを学ぶことが出来た。カメラワークを覚えるのは大変だったが、子どもたちに分かりやすいように場面ごとを写すことができ、子どもたちも楽しそうに見ていたのが嬉しかった。また、小道具作りも難しい部分もあったが、ひとつひとつダンボールや新聞などを使って作り、絵の具で色を塗り、本物に近いものを作り上げた。1から作っていくことは大変だったが、皆で協力して作り上げることで良いものが出来た。裏方の仕事だったが、貢献出来て良かったと思う。(大隈彩花)

初めての授業でテーマや導入を決め劇をすることに決めた。それから、悪役になりそうなオオカミが他の動物に意地悪だと誤解されるが実はとても良い子だという流れにしようとするべく決まったがオリジナルのストーリーを考えるのがとても大変だった。ある程度、ストーリーが出来たのが中間発表の前で、そのあと先生方からアドバイスを受け、セリフが変わり最終的にストーリーが決まったのが発表会の1週間前だった。セリフを覚えるためにみんなで集まって何度も練習し、立ち位置、はける方向などを確認しながら頭に叩き込むのが大変だった。出てくる動物たちは同じような色の動物や耳の形があると子どもたちにとって分かりにくいいためそのようなことを踏まえて考え、どのような性格にして、その性格に合うような服装を考え作る作業がとても楽しかった。作った耳を褒めてくれてとても嬉しい気持ちになった。

本番では近くに子どもたちや見ている人がいる感覚があまり無かったため、思っていたよりかは緊張しなかった。だが、セリフや流れが飛ばないようにするのに必死で子どもたちの様子や声を見ながら劇をすることが出来なかった。授業で自分たちの劇とそれを見ている子どもたちの様子を動画でみて思っていたよりも子どもたちが反応してくれていたのが嬉しかった。初のリモートでの劇で見本となる先輩方はホールでの発表で手本となるものが無かったため、工夫するべきことが分からずに戸惑うこともあったが手探りでしたが子どもの姿を想像することの大切さを改めて学んだ。(小野綾香)

今回の遊びと表現発表会を通し、子どもたちに自分たちの伝えたい事をリモートで伝える事は難しく感じた。私たちは劇を通して伝えると決め台本づくりから始めたが、言葉の言い回しには悩む所が沢山あった。捉え方や伝わり方の違いが言葉の使い方、選び方によっては違って来る事にも気づいた。グループの皆でよく話し合い意見交換をする事で考え方の違いや納得できることもあり、自分の考えを持ちつつ、他の人の意見を聞き受け入れることの重要さにも今回改めて気づいた。本番では、私はナレーションを担当し、ゆっくり進めていくよう心がけたが、子どもたちはあまり理解できずに話についていけない事が分かった。子どもたちにより分かりやすいように話し合いの中でも何度も出て台本を立てていたつもりだったが、内容が難しかったのか、リモートだからだったのか、色々と改善点が見つかった。小道具や背景、カメラや切り替え、衣装、ピアノなどそれぞれ役割分担したものをグループ内皆で計画的にできた所はとても良かったなと感じている。(片渕杏子)

今回の遊びと表現発表会を通して、例年とは違い、画面上ですることになり、分からないことばかりだった。しかし、子ども達に何を伝えたいか、その伝えるためにはどのようにしたら良いかなど、みんなで案を出し合い、考えていくことができた。カメラでは、カメラワークだったり、声の聞こえ方、劇の内容の分かりやすさなど、合わせてみないと分からないことがたくさんあり、いろいろなことを学ぶことができた。子ども達の反応でも、一生懸命見てくれて、反応を返してくれたり達成感を感じることができた。とても良い経験をする事ができた。(川上梨恵)

初めてオンラインで劇をしてみて、子どもたちの反応を見ながら劇をすることが難しかったと思った。台本を一から作ったため、苦戦することもたくさんあったけど、自分の得意なことを認めたり、相手を思いやる気持ちを持ったりすることを子どもたちに促せるように、自分たちであらすじを工夫することができて良かったと思う。「やっつける」という言い方を「びっくりさせる」という言い方に変えるなど、言い回しを変える工夫もすることができた。小道具では、実物大の木を作ったことで、わかりやすくなったと思う。劇の中では、子どもたちへの問いかけもすることで、より劇のお話に引きつけることができたのではないかなと思う。劇をする時は、表情やジェスチャーを伝わりやすいように工夫することができた。

また、カメラの見え方で遠近法を使ってオオカミが家に入っているようにみせたり、橋を本当に揺らしているようにみせたりする工夫をすることができた。(木下智永里)

何から手をつけて良いのかわからずなかなか進むことが出来なかった。他のグループと比べて進むことが遅くて不安になった。だけどどのグループより仲良くて、カメラ使う際もその時だけは集中し、ふざける時はふざけ、真面目にやる時は真面目にやるというメリハリのついたグループでとても楽しかった。1回目の練習はグダグダだったが、完成に向けて練習し、練習を繰り返していくうちに台本も覚えたり、音楽もいれたりし、最終的には目立った間違いもなく楽しく完成させることが出来た。(三宅芹菜)

今回の発表を行ってみて1つのテーマで物語を作ることの難しさをととても感じた。子どもたちにどのようなことを伝えたいかによって台本も変わり、1度作った台本で劇をしてみても自分たちの思っている思いと子どもたちへの伝わり方が違ったりととても苦労し、言葉1つで子どもたちのイメージも変わることもわかった。「思いやり」というテーマで子どもたちにみんなそれぞれいい所があるということ伝えたいと思いみんなで沢山案を出しあい、最初は狼に他の動物たちが仕返しをするという設定にしていたがそれを子どもたちが見た時に良いようには映らないのではないかということからみんなで狼を驚かせると言う方向に変えてできるだけ子どもたちが劇を見た時にマイナスのイメージをもたないようにした。実際に練習し始めるとカメラを使って行うということでどのうようにしたら上手く映るかや場面によってどのように見せるかをみんなで考え何度も台本やカメラワークを変えて練習をした。セットを作るのも、色や大きさを考え子どもたちが見た時にすぐ何か分かるように工夫した。また、オンラインで行うことで子どもたちに質問などをし子どもたちと掛け合いをしながら子どもたちが飽きることはないように工夫した。この練習を通して、クラスの違う仲間たちと沢山意見の交換をしたり一緒に1つのことをやることで今までよりも絆が深まったように感じた。本番は子どもたちの反応があまり分からなかったりと大変なこともありとても緊張したがみんなで笑顔で終わることが出来たととても良かった。今回のこの経験を今後保育者となった時にいかしていきたい。(山下絢女)